新年 はたちのお祝い!! おめでとう

左から 鍋内凌空さん、白濵光玖さん、濱崎沙也加さん

「島のひかり」ホームページアドレス
https://shimanohikari.jimdofree.com/

発　行
カトリック浦頭教会
広報委員会
五島市平蔵町2716
TEL　0959㉓0072
印　刷・㈲才津印刷所

「贈り物」

主任司祭　工藤　秀晃

2024年を迎えました。主の御降誕と新年の慶びとともに、神さまの豊かな祝福をお祈り申し上げます。

さて、次のお話をご存知でしょうか？【あるところに、釈迦が多くの人たちから尊敬される姿を見て、ひがんでいる男がいました。「どうして、あんな男がみんなの尊敬を集めるのだ。いまいましい」男はそう言いながら、釈迦をギャフンと言わせるための作戦を練っていました。

そんなある日、釈迦が毎日、同じ道のりを散歩に出かけていることをその男は知りました。そこで、その男は散歩のルートで待ち伏せして、群集の中で口汚く釈迦をののしってやることにしました。「釈迦の野郎、きっと俺に悪口を言われたら、汚い言葉で言い返してくるだろう。その様子を人々が見たら、あいつの人気なんてアッという間に崩れるに違いない」。

そして、ついにその日が来ました。男は釈迦の前に立ちはだかって、これでもかというくらいにひどい言葉を投げかけます。でも釈迦は、ただ黙ってその男の言葉を聞いておられました。弟子たちは悔しい気持ちで、「あんなひどいことを言わせておいていいのですか？」と釈迦にたずねました。それでも、釈迦は一言も言い返すことなく、黙ってその男の悪態を聞いていました。

その男は、一方的に釈迦の悪口を言い続けて疲れたのか、しばらくの後、その場にへたりこんでしまいました。どんな悪口を言ってみても釈迦は一言も言い返さないので、なんだか虚しくなってしまったのです。その様子を見て、釈迦は静かにその男にたずねました。「もし他人に贈り物をしようとして、その相手が受け取らなかった時、その贈り物は一体誰のものだろうか？」。こう聞かれた男は、突っぱねるように言いました。「そりゃ、言うまでもない。相手が受け取らなかったら贈ろうとし

2ページへ続く

た者のものだろう。わかりきったことを聞くな」。男はそう答えてからすぐに、「あっ」と気づきました。釈迦は静かにこう続けられました。「そうだよ。今あなたは私のことをひどく罵った。でも、私はその罵りを少しも受け取らなかった。だから、あなたが言ったことはすべてあなたが受け取ることになるのだよ」と。】

往々にして、自分が放った言葉は回り回って自分に帰ってくるものなのに、今の時代は、誰かを蔑むことによって自分を際立たせようとすることが何と多いことでしょうか？善い言葉を使うと自分や周りに良い影響を与えるようになり、逆に、悪い言葉を使うと自分だけではなく周りにまで悪い影響を与えてしまいます。願わくは、心からの賛美を神様に献げ、人を生き生きと活かす言葉を贈る、そのような一年でありたいと思います。

中村長八神父様列福に向けて

渡伯（ブラジル）一〇〇周年事業

ブラジルで一九九四年発足した「中村長八神父列福調査委員会」、そしてヴァチカンの「聖者・列福者聖省」に送られた手紙は二〇〇六年の列福調査の開始につながっていきます。

現在は、二〇二〇年にヴァチカンの「聖人・福者聖省」から通達された、第一段階・資料収集レベルから第二段階・資料の研究・精査を通して、列福に向けて継続審査する意味があるか正式表明する段階に入っています。

今年は、長八神父様がブラジルに渡って、ちょうど百年。現地アルバレス・マシャードでは祝賀会が行われました。ここ生誕の地浦頭でも、それに呼応する必要有りということで、長八神父様と同じ地（ブラジル）で二十三年間・宣教活動に従事し、二〇十年には長八神父様の遺体の再発掘にも立ち合われた東京在住の青木神父様に講話を依頼したところ、神父様は、その申し出を快諾してくださりました。十月二十八日、東京の暁星小学校のスクールチャプレンとして多忙の中、翌日の講話のため五島へ来ていただき、青空のもと、飛行機から降りられた神父様を赤尾議長と島のひかりの木口氏で出迎えました。

その後、椿ホテルでの夕食会においては、隣のテーブルに前田万葉枢機卿様が座られるとい

う、偶然的な出会いも有り、とても楽しい会食となりました。

翌日は九時のミサから始まり、長八神父様のブラジルでの超人的な活躍を讃えるため、新しく作られた歌（赤尾　満治神父様作曲・木口　重憲氏作詞）を聖歌隊が披露し、美しいコーラスが講演会の始まりを告げました。

冒頭、工藤神父様からこの事業が行われる経緯について説明がなされました。続いて、島のひかり編集長の木口氏から堂崎天主堂にある長八神父様の資料の代表的な三つの物についての話しがあり、その後中村神父様の生い立ちと、ブラジルでの神父様の気さくな人柄を示すエピソードが紹介されました。

青木神父様の講話は、長八神父様と同じアルグァレス・マシャード付近で宣教活動をされていた青木神父様ならではの、実体験に基づくもので、聴く者に直接響く内容でした。

「長八神父様が宣教した地は日本国土に及ぶ様な広大な土地。その地で主に自分の足で布教していった長八神父様の靴は穴がしっかりあく程、使い古されていました。彼は毎日数十㎞を、ミサで用いる祭具を入れた二つの大きなトランクを肩に下げながら一軒一軒、神の教えと隣人愛を説きながら歩き続けました。長八神父様の情熱は、ブラジル人も日系人も惹きつけてやまないものでした。彼への尊敬は今もしっかり続いています。

長八神父様の列福活動の背景・芽ぶきには一九六七年の日伯司牧協会の発足があり、遺産の調査・著述保全委員会発足、研究センター建築、二〇十年の遺体検証等も行われてきました。

そして、今、ローマにおいて列福者の列に加わるかどうか、集められた資料についての研究・精査が行われている段階に達しています。

この浦頭小教区の信徒の人達も長八神父様の祈りを続けていく中で、『これは、もしかして奇跡に価（あたい）するのでは。』と、思ったら工藤神父様、あるいは木口さんに伝えていただければ幸いです。」と語られました。

講話の後、青年会、女性会から花束、謝礼、長八神父様のために新しく出来たCDが手渡されました。

講話の後、青木神父様は工藤神父様と教会役員との食事会を楽しみ、その後、中村神父様ゆかりの地もまわられました。

中村長八神父様の墓から発掘された遺物

その道中で強調されていたのが「長八神父様のお墓の発掘時、出て来たものを、ぜひ、ふる里である長崎の地に展示して下さい。」との事でした。

その遺物は、髙見名誉大司教様に大切に保管されていた事が分かり、名誉大司教様の許可の元、ふる里に帰ってきました。今は司祭館にありますが、今後の事はこれから検討される事になります。

下五島カトリック球技大会に寄せて

秋は老いも若きも暑気が抜けた中、食欲が増し、体も活発に動き出します。十月一日、信徒の親睦を深める目的でミニバレーやペタンクに汗を流しました。

巷でも、コロナ禍を脱し、運動会の花盛りです。

遡ること半世紀以上、木口末永氏所有の畑地が木口氏の英断の元、現在の教会の敷地として提供されます。

敷地造成及び整地が終わった後、その喜びを表す為、大運動会が行われました。

もともと外海地区から信仰を続けるためにこちらに来た人達が多いこの地。当時、現金収入が少なかった信徒にとって教会建築は大変な労苦があったはずです。大運動会は、その信徒の歩き出す背中を押してくれる神様の〝息吹〟だったかもしれません。

下五島地区の代表として ミニバレーボール交流会（純心高校にて）

中口しずえ

コロナ禍で色々な規制がありスポーツ交流も中止を余儀なくされていましたが、今年は久しぶりにミニバレーボール大会が行われました。浦頭小教区女性部は、下五島地区大会で優勝し十一月二十三日長崎教区大会へ行って来ました。

毎週金曜日夜に奥中体育館で練習があり、毎週は参加できませんでしたが、自分の下手さを痛感しながらも珍プレー好プレーで皆の笑顔もあり楽しい練習でした。翌日からの筋肉痛ももれなくあり、足腰腕と全身殆どが筋肉痛で四・五日は筋肉痛とも戦っていました。

県大会当日は早朝より大波止に集合し、ジェットフォイルを待つ間に選手宣誓の練習をしたり、会場に着いたら間もなく開会式があり試合が始まりました。予選ブロックで優勝・3位チームと当たり残念ながら決勝戦には進めませんでしたが、皆で一つのボールを追い繋いでいく姿はカッコ良かったです。（私は応援を頑張りました。）

最後になりましたが、練習に参加していただいた方、差し入れをして下さった方ありがとうございました。長崎会場では毎回五島の離島参加者の為にと募金もしていただいており、会場の純心女子高校や役員の方の協力など本当に感謝しながらの参加でした。

県大会出場メンバー（純心女子高校会場にて）

牢屋の窄殉教祭

十月二十二日、穏やかな秋晴れの中、四年ぶりに下五島地区信徒が久賀島に集い、牢屋の窄殉教祭が行われました。船にて久賀島に到着すると、歩ける方は田ノ浦から久賀小・中学校までの約五キロの道中を景色を楽しみながら一時間程かけて向かいました。昼食を各々学校周辺で済ませ、牢屋の窄までの道のりを百五十名余りのロザリオ行列にて向かいました。今年は祭壇を聖堂内に設け、信仰之碑の朗読と献花によりミサが始まり、

中田地区長神父様より、主イエスの御言葉、「神のものは神に返しなさい」に関して、尊敬してやまない方が病気になり、神様に残りの命の時間までも返すような状況であった。重い十字架を背負った状態でも私達に柔和に接してくれる。この地でも枝だけでなく幹までも返さないといけない状況であった先祖は堪え忍び、証し人となった。「我々も一歩踏み込んだ生き方を学びたい」という説教の言葉。牢屋の窄に行く度に、強い信仰を持って日々を生きていきたいと力づけられます。

中村長八師に学ぶ(6)
『巡回宣教の成果』

先日、浦頭教会で中村長八師についての講演会をして下さった青木神父様に一度お会いしました。現在は暁星学園のすぐ前の修道院に住んでおられ、学校で教鞭もとっておられます。

ブラジル宣教の体験をとおして出合った長八師の列福運動を進めて下さる第一人者です。引き続き協力を仰ぎながら運動の進展のために祈りを捧げたいと願っています。

今回も中村師御本人の便りを通して御活躍の様子を伝えたいと思います。

「私も巡教半途にて一寸帰宅して居ますが随分志願者も受洗者も増加進出致してすこぶる面白くなりました。そのうちアヴァン耕作地にて一日に百十九名の受洗者が最高で御座居ました。その写真を別包にて贈附致しました。只遺憾なる事は公教要理祈本の不足で御座居ます。古本でもよろしう御座居ますが誰か御寄贈して下さる方はいませんでしょうかなあ。」

また同誌上で編集者が長八師への協力を願っています。「ブラジルの中村神父さん、全く日本人の為に犠牲となり、教会からは何等の手当も受けず僅少の日本信者の寄附で生きて活動しておられる欣慕（きんぼ）すべき神父さんへのお願いに読者諸君が慈善心を動かし下さらんことを祈る。大浦天主堂では司教様を始め五人の神父が公教要理一五〇祈祷文二〇を寄贈した。五冊でも十冊でも、志あるお方は寄附して下さい。」

※欣慕＝喜び慕うこと

受洗者数が多いことだけで宣教についての判断を下すことはできませんが、やはり長八師の働きの熱意と実りは結果に表れていると思います。これもまた福者に選ばれる一条件ではないでしょうか。

奥浦慈恵院の歴史⑥

奥浦慈恵院院長　Sr入口 里子

時代と共にこの養育事業は充実し、必要な設備は整えられつつありましたが、慈恵院に収容されている子どもたちは、病気がちな子どもが多く、会員たちは毎日のように対岸の樫ノ浦の江口医院まで櫓をこいで通院しました。往復するのに一日かかり、子どもを抱く者と櫓を漕ぐ者とで3、4人の会員が船に乗り込んでいました。会員たちが看病をしても短い命を終える子どもも多く、心を痛めていました。

その当時、ペルー師の後任として堂崎教会の主任司祭となった出口市太郎師は、大正9年奥浦慈恵院の院長に就任していました。教会の主任司祭がこの養育事業施設の院長になったのは例外的なことでした。大正11年会員の一人、木口マツは埼玉県にある武蔵野学園、社会事業職員養成所において、社会事業の歴史、外国における社会事業の実態といった知識を身につけていく間に、奥浦慈恵院が行っている養育事業の社会的な意義に目を留め、また同時に、慈恵院の現状に改善すべき多くの点を見出しました。特に栄養障害に何らかの対策を講じる必要を強く感じました。

研修を終えて木口マツは、出口師に栄養障害への対策として健康管理、養育の専門家が必要であるという考えを伝えました。そこで出口師は医師や看護師を早急につくる計画を立てたのです。大正15年、奥浦伝道学校で勉強していた浜崎タカが共同体の仲間に加わり、出口師は彼女に医師になるための養成を行ったのです。

昭和10年、浜崎タカは東京女子医学専門学校を卒業し、医師の資格を取得しました。医師養成の計画は10年目にしてようやく実現しました。浜崎タカは、福江の公立五島病院に1年間勤務し、そして昭和11年10月25日、奥浦診療所を開設することになりました。この診療所は昭和2年に新築、改造された院舎に付属している一室を改造したものでした。こうして、医師の指導により収容児の栄養障害、健康管理は徐々に改善されていきました。

一方、医療に恵まれない奥浦の地域の人々も、この診療所を非常に必要としていました。患者は奥浦だけにとどまらず、五島各地から押し寄せてきました。奥浦診療所では必要に迫られて、内科、小児科、外科、眼科、耳鼻科に至るまでおよそ全ての分野の医療サービスが行われていました。昭和18年奥浦診療所に2人目の医師となった浜崎ミサヲ（妹）が加わり医療活動が活発に行われました。奥浦診療所が開設されると同時に、会員たちは看護婦として、助手として医療に参加しました。そして、より充実した活動が行えるよう、医療事業に備え専門技術（医師、薬剤師、看護婦、各種技師、事務、管理等）を身につけるという計画のもとに養成は始められていったのです。これは、会員自身の適性、能力に応じ、また奉仕の場に適合させるように配慮されました。

神羊館の横に六～七台車を駐車できます!!

（11/19）

壮年部の奉仕作業で司祭館に通じる道横のだるま型に剪定されていた樹木が撤去され整地されました。重機による作業も、根っこと格闘は、すご～く大変だったと聞きました。お疲れさまでした。駐車をする時はゆっくりと安全第一です。対向車とカーブにも注意してください。

夜の教会きれいでショー!!

（11/27）

教会の内・外の清掃とイルミネーションの設営がありました。年ごとに人員不足と高齢化で高い所の作業はちょっと心配でした。今回は若者と婦人の協力もあって、大変ではなく楽しく終わりました。作業手順は引き継がれていきます。なにより自分の手がけた灯は格別なものです。点灯は12月3日までおあずけ。そして、いつも協力いただく「おくうら夢のまちづくり協議会」の皆さん、光の回廊は毎回、最高傑作です。サンタさんもここを通ってくることでしょう。

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」世界文化遺産登録5周年記念 クリスマスコンサート

（12/3）

タイトルは長いが五島市の主催で奥浦混声合唱団・福江少年少女合唱団が出演しました。

コロナ禍、聖堂でのコンサートは4年ぶり。「きよしこの夜」からスタートし心地よい響きは、浦頭教会ならではのもの。途中、外のイルミネーションも点り、子どもたちの歌声は心を和ませ、そして最後は全員で「蒼き故郷」を。平和であることを実感し涙が…という方も。〝歌の力は偉大なり〟

秘跡

◎主よ、永遠の安息を

・テレジア　鍋内　松枝　95歳
　十月十一日帰天　浦頭
・レオ　竹口　光郎　85歳
　十二月六日帰天　浦頭
・テレジア　梅木モニカ　89歳
　十二月七日帰天　大泊
・テレジア　赤尾　弥生　64歳
　十二月九日帰天　浦頭

○洗礼

十二月二十五日
マリア　横山加代美　76歳
南河原

○ありがとう

次の方より御芳志を頂きました。感謝いたします。

本村　久美様　東京都
坂口美知子様　五島市
梅木栄二郎様　兵庫県三田市
入口　兵衛様　五島市

おたより

浦頭の話題を楽しく拝読しています。

皆様のご活躍を心から期待しています。　東京都　本村久美

ふる里だより

第29回 ナイターペタンク大会

「目標、まずは1勝！　目指すはビギナーズラック！　作戦は当たって砕けろ！」

つばき蒸溜所チームのすばらしい選手宣誓の後、奥浦ナイターペタンク大会が約80の参加チームを迎え開催されました。

下は小学生から上はじいちゃんばあちゃんまで幅広い年齢層の方々が集まり、予選、決勝、そして皆が一番楽しみにしている抽選会と、3日間の日程で行われ、大きな盛り上がりを見せてくれました。

一球一投するごとに歓声やため息が上がる中、見事頂点に立ったのは、2年ぶり14回目チームでした。

コロナ禍の規制も緩和され皆が一同に集い盛り上がれるナイターペタンク大会、来年の開催も楽しみです。

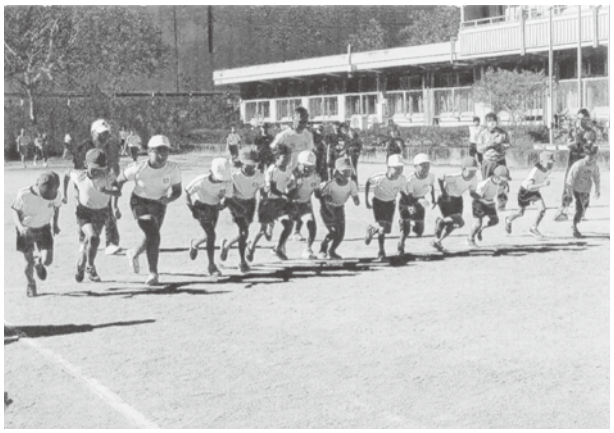
スポーツフェスタ in 奥浦

10月22日、毎年恒例の保育園児、小中学生によるマラソン大会、スポーツフェスタin奥浦が開催されました。

今年は小学校で収穫したお米の販売、慈恵院によるおにぎりや保護者によるうどんの振る舞いもあり、また中学生にとっては最後のフェスタという事もあり、多くの父兄の方も応援に来られ大きく盛り上がりました。

保育園児から順にスタートし、学年ごとに順位を競い、速くゴールした子供には大きな歓声が上がり、後方を一生懸命に走ってくる子供には横に付き添い応援しながら走る、奥浦ならではの光景に胸が温かくなりました。

残念ながら中学生の活躍は今回で見れなくはなりますが、元気な奥小の子供達の頑張りをまた来年見に行こうと思います。



編集後記

昨年はウィズコロナが定着し、かなり忙しく感じた一年だった。

どうぞ今年が皆様にとって希望に満ちた年になります様に。

木口　重憲

全世界が平和でありますようお祈り致します。

竹山　功

コロナも収束が見え始めました。新年度より元気を出して頑張っていきましょう。

竹山　要司

今年は半泊教会のミサに参加したいと思います。

入口　信

今年は祈祷書を少しスラスラ読めるようになりたいです。

江口　初子

今年もヨロシク!!

Sr木口直恵
小田洋市
木口誠也